

## サミュエル・バムフォードの詩におけるピータールー虐殺事件

江口 誠

外国語教育講座

### The Peterloo Massacre in the Poetry of Samuel Bamford

Makoto EGUCHI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

イギリス・ランカシャー州のミドルトンで生まれたサミュエル・バムフォード (Samuel Bamford, 1788–1872) は、ラディカル (radical) つまり急進主義者としての側面が強い。彼の著作の中で最もよく知られているものは、*Passages in the Life of a Radical* (1839–41) 及び *Early Days* (1848–49) の二つの自叙伝であり、特に前者の題名は彼の人生そのものを象徴している。イギリスの著名な歴史家エドワード・P. トムスン (Edward P. Thompson, 1924–93) は、名著『イングランド労働者階級の形成』(*The Making of the English Working Class*) の中で、バムフォードが果たした歴史的な役割及び彼の功績を随所で賞賛している。その代表的なものを以下に挙げたい。

Samuel Bamford serves as a bridge between the folk traditions of the eighteenth-century communities (which lingered long into the next century) and the more self-conscious intellectual attainments of the early decades of the nineteenth.

The ‘sensible and modest man from Middleton’ was Samuel Bamford, the weaver and—when every criticism has been made—the greatest chronicler of early nineteenth-century Radicalism. (Thompson 325, 698)

このように19世紀初頭イギリスにおける社会改革の一翼を担ったとされるバムフォードではあるが、その一方で *The Weaver Boy; or, Miscellaneous Poetry* (1819) をはじめとして、*Miscellaneous Poetry* (1821), *Hours in the Bowers. Poems, etc.* (1834), *Poems* (1843) そして *Homely Rhymes, Poems, and Reminiscences*. (1864)<sup>1</sup> など、数多くの詩集を出版した事実は余り知られていない。英文学史では職工詩人 (“a weaver poet”) として取り上げられることもあり、例えばイギリス・ロマン主義文芸批評家のジェローム J. マクガン (Jerome J. McGann) が編集した *The New Oxford Book of Romantic*

*Period Verse* には、バムフォードの詩が2篇収められている。しかしながら、また例えばデイヴィッド B. ピリー (David B. Perie) 編集のアンソロジー *The Romantic Period* では、彼は “Every man in Samuel Bamford’s 6,000-strong contingent marching in from the Rochdale area wore ‘a white Sundays’ shirt.” (365) と紹介されている。つまり詩人としてではなく、いわゆる「ピータールー虐殺事件」(Peterloo Massacre) でデモ隊を率いた主導者として名前が挙げられているに過ぎない。<sup>2</sup> この事件は、1819年8月16日、マンチェスターのセント・ピーター教会前広場に於いて、女性や子供を含む一般民衆が死亡または負傷した出来事である。ジェームス・チャンドラー (James Chandler) は、自著の中でこの事件の重要性を以下のように位置づけている。

All this is to say that “Peterloo”... names an event of indeterminate duration that marks a major transformation in the practices of modern literary and political representation, one understood in its moment to have revolutionary potential. (18)

そこで本論では、急進主義者として活躍したサミュエル・バムフォードが残した数多くの詩の中から、特に人生の転機となったピータールー虐殺事件に関係する詩を幾つか取り上げ、その事件と彼の詩作との関係について分析する。そこから浮かび上がるのは、彼の詩が時代の変化、社会情勢そしてイギリス政府の対応と無関係ではなかったということである。

計11名の死者と数百人の負傷者を出したマンチェスターでの集会から10日後の1819年8月26日、バムフォードは大反逆罪 (High Treason) の罪で逮捕されている。彼はその様子を、以下のような韻文で表現している。

They came at night, and did surround  
My humble dwelling whilst I slept;

And I awoke, and heard a sound  
Of feet, as if they softly crept;  
And then, a firmer foot there stept,  
And then, I heard a number more;  
As if a marching pace they kept;  
I guessed there might be a score,—  
And then they knocked at my door.

Awake! my love! I softly said,  
Awake! the enemy is near.  
Come; kiss me; be not thou afraid,  
A wife of mine should never fear.  
Arise, and dress yourself, my dear;  
These fellows brook but short delays.  
Here is your petticoat; and here  
Your kirtle, handkerchief, and stays;  
For me, love, I can abide their gaze.  
(*Passages* 165)

全体的には、ほぼ弱強4歩脚 (iambic tetrameter) でまとめられた9行連であり、ababbcbccという押韻形式を持つようである。もし弱強5歩脚 (iambic pentameter) 8行の後の9行目に弱強6歩脚 (iambic hexameter) つまりアレクサンダー格 (Alexandrine) が続いているならば、スペンサー連 (Spenserian Stanza) となっていたであろうが、実際はそうではない。<sup>3</sup>

この詩には“the enemy”である“*They*”つまり警官 (constables) に対する一種の嫌悪感のようなものを感じ取ることができるが、それ以上に強調されているのは、バムフォードの妻への気遣いであろう。そして、そもそもこのような事態、つまり逮捕という結果を招いた政府の対応に対する怒りの表出がないことが特徴である。韻文というよりは、ただ淡々と逮捕時の状況が述べられているに過ぎない。

では、バムフォードはピータールー虐殺事件そのものを題材にし、自身の感情を吐露するような詩を創作していないのだろうか。例えばこの事件を知ったイギリス・ロマン派詩人のパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、当時滞在していたイタリアのレグホーンで『無秩序の仮面』(*The Mask of Anarchy*) という詩を創作している。ただし、このシェリーの詩は、恐らくそのあまりにも過激な内容のため、出版を依頼された文芸雑誌 *The Examiner* の編集長であるリー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) の判断によって1832年まで出版されることがなかった。そして、バムフォードのある詩についても、シェリーの場合とほぼ同じ理由により、その公表が制限されていたのではないかと考える。ただし、バムフォード自身の判断によってである。

それは“Ode to a Plotting Parson”<sup>4</sup>と名付けられた詩

である。第1連はabab、それ以降はaabbの押韻形式を持ち、計15連からなる4行連 (Quatrain) である。<sup>5</sup> まずはその第1連を見てみよう。

Come over the hills out of York, Parson H—  
Thy living is goodly, thy mansion is gay:  
Thy flock will be scattered, if longer thou stay,  
Our shepherd, our vicar, the *good* Parson H—.  
 (“Ode to a Plotting Parson”, 1-4)

詩の内容について論じる前に、1820年に出版されたものと1864年の *Homely Rhymes* に収められたものでは、タイトル及びその内容に若干の相違があることに注意する必要がある。まずタイトルは後年“Lines to a Plotting Parson”に改題されている。内容的には *Homely Rhymes* では、1行目が“Come over the hills out of York, parson Hay;”そして4行目が“*Our shepherd, our vicar—the good parson Hay.*”となり、句読点や大文字と小文字の違いなどの細かい変更点を除くと、“Hay”という個人名が明記されている点は無視できない。

この人物は、ソルフォード四季裁判所 (Salford Quarter Sessions) の有給議長ウィリアム・ロバート・ヘイ師 (Rev. William Robert Hay, 1761-1839) であり、ロバート・ウォームズリーは、彼に関して“the co-opted stipendiary magistrate on the Select Committee who acted at Peterloo”という解説をしている (Walmsley 132)。マンチェスターでの集会の数日前、ヘイ師は過去にパレードを平和的に解散させた経験を持つ北部地区司令官 (Commander of the Northern District) のジョン・ビング将軍 (General Sir John Byng, 1772-1860) に手紙を送り、状況が改善されたとして彼のマンチェスター訪問を断っていた。この決断を下したヘイ師を含む治安判事らに対してドナルド・リードは、“This was perhaps the most important single decision leading to the bloodshed at Peterloo” (Read 124) として、惨事の原因の一つだったのではないかと主張している。

続いて第2連を見てみよう。

Oh! fear not, for thou shalt have plenty indeed,  
Far more than a shepherd so humble will need,  
Thy wage shall be ample, two thousand or more,  
Which tythes and exactions shall bring to thy store.  
 (“Lines to a Plotting Parson”, 5-8)

ここでも細かな句読点等の変更箇所以外に注目すると、8行目は1864年の *Homely Rhymes* では“Which rent and exaction...”となっている。イギリスに於ける十分の一税制度は1836年には廃止されているが、実際は同年に制定された Tithe Commutation Act (正式には An Act for the Commutation of Tithes in England and Wales) とい

う法令によって、より現実的な地代負担 (rent charge) による支払いに変更されたに過ぎない。従って、バムフォードは時代の変化に合わせて表現を変更したということであろう。内容的には、第1連と同じトーンでヘイ師を痛烈に批判している。実はこのヘイ師は、マンチェスターでの「対応」が認められ、1820年1月、年額1,730ポンドの価値があり、イギリスで最も裕福なロッチデール (Rochdale) の教区が与えられている (Read 184, Reid 221)。そこで、バムフォードはその事実を皮肉ったものと考えられる。因みにジョイス・マーローはヘイ師を“an ambitious man”, “On the surface he was smug, complacent and self-righteous” と酷評している (Marlow 50)。

次に第3連を見てみよう。

And if thou *should'st* wish for a *little increase*,  
The lambs thou may'st *sell*, and the flock thou may'st  
*fleece*  
The market is good, and the prices are high,  
And the butchers are ready with money to buy.  
 (“Ode to a Plotting Parson”, 9–12)

この連については、“the” や “and” の削除等の些細な変更はあるが、特に目立ったものはない。ジョン・ガードナーは、“Due to the work of the ‘butchers’, Hay was rewarded with the parish of Rochdale, ...” と述べ、12行目の “the butchers” は、ピータールー虐殺事件で民衆を切りつけた義勇農騎兵団 (yeomanry cavalry) を連想させると解釈しているようである (Gardner 151)。

以下、第4連を見てみよう。

Thy dwelling-house pleasantly stands on a hill,  
And the town lies below it so quiet and still:  
With a church at thine elbow for preaching and prayer,  
And a rich congregation to slaver and stare.  
 (“Ode to a Plotting Parson”, 13–16)

第3連までと同じく、ここでもヘイ師への批判が展開されている。第4連の主な変更点は、16行目の “slaver” が “ponder” に書き換えられていることである。特にこの語句の変更については注目に値する。“slaver” という、辛辣で嘲笑的な表現から一転して、その後続く “stare” と同様、単なる行為を表す語が採用されているからである。つまりは、詩人の攻撃的なトーンが意図的に少々抑えられたということであり、そもそも教区民を卑下する表現になる可能性があっただけに、宗教に対してある一定の配慮がなされたのだと考えられる。

次に第5連を検証してみよう。

And here, like a good loyal priest shalt thou reign,  
The cause of thy patrons with zeal to maintain;  
And the poor and the hungry shall faint at thy word,  
As thou doom'st them to h—! in the name of the Lord.  
 (“Ode to a Plotting Parson”, 17–20)

主な変更点は、18行目の “patrons” が “patron” に、そして20行目が “As thou threatens with hell in the name of the Lord.” となっていることである。因みに、1864年版の “patron” に関しては、以下のような注釈が詩人自身によって付け加えられている。

The vicarage of Rochdale is in the gift of the Archbishop of Canterbury, and it was conferred on the Rev. W. R. Hay, shortly after his distinguished services in the affair of St. Peter's Field, in 1819.

“patrons” から “patron” という単数形への変更は、第2連の “tythes” (すなわち “tithes”) から “rent” への変更と同様、上記の注釈に書かれた「カンタベリー大司教の権限」という事実即した表記に合わせるためであると推測できる。因みに、ロバート・ウォームズリーによれば、“patrons” は政府を表しており、ロッチデール教区の授与がマンチェスターでの対応に対する報酬であるのか、以前から計画されていたことなのかについて、当時政府側と急進派側で解釈が分かれていたようである (133n)。従ってこの注釈は、形式的にはカンタベリー大司教からの授与であると認めながらも、実際はそうではなかったという急進派の捉え方を明示したものと解釈できる。さらに “his distinguished services” という表現については、実際にはいわゆるピータールー虐殺事件で多くの死者と負傷者が出たことを考慮すれば、バムフォードの皮肉が十分に込められていることは明白である。また、詩行20行目の変更については、第4連に於ける “slaver” から “ponder” への書き換えとほぼ同じ理由ではないかと推測できる。つまり、1820年版では恐らく何の罪もない “the poor and the hungry” とバムフォードが呼ぶ人々が、ヘイ師によって「地獄へと導かれる」と解釈される可能性が生じるからである。そこで、彼が「地獄でもって脅迫する」とすれば、批判の対象をヘイ師一人に絞ることができる。

さらに注目すべきは、1864年出版の詩では、第6連以降の内容が全て削除されているという事実である。では、その消失した20行の詩にはどのようなことが書かれていたのだろうか。そして、その理由は何なのか。以下、第6連以降の内容を分析してみよう。

And here is a barrack with soldiers enow,  
The deed which thou wilt all ready to do;

They will rush on the people in martial array,  
If thou but thy blood-dripping cassock display,

And Meagher shall ever be close by thy side,  
With a brave troop of yeomanry ready to ride;  
For the steed shall be saddled, the sword shall be bare,  
And there shall be none the defenceless to spare.  
("Ode to a Plotting Parson", 21-28)

上記第5連まではウィリアム・ロバート・ヘイ師の住居や教区に言及していたが、この第6連及び第7連では、詩人の視点がまた別の事項、つまりはピータールー虐殺事件へと向けられていることが分かる。例えば24行目の“thy blood-dripping cassock”に見られるような、聖職者と殺戮を関連づけるイメージは印象的であり、また衝撃的でもある。さらに25行目に登場する“Meagher”とは、ピータールー虐殺事件当時ラッパ手の役目を担っていたエドワード・マー (Edward Meagher) を指す。因みに、バムフォードと同様に逮捕され投獄されたヘンリー・ハント (Henry “Orator” Hunt, 1773-1835)<sup>6</sup>は、彼を“the infamous Meagher”と呼んでおり、その評判の悪さで知られていた (Walmsley 409)。また、彼の言動に関して、ジョイス・マーローは以下の逸話を紹介している。

His Peterloo activities, spending the quarter of an hour murdering his fellow creatures, caused intermittent crowds to collect outside his house. They did nothing but hiss and boo but one night, being very drunk, Meagher fired on them from his window. He did not kill anybody but, as with the MYC's activities on August 16th, it was more by good luck than good management. (168-69)<sup>7</sup>

MYCとは、エドワード・マーが所属していたマンチェスター義勇騎士団 (Manchester Yeomanry Cavalry) のことで、マンチェスターでの集会で多数の犠牲者を出した元凶である。ロバート・レイドは、“Meagher's weapon ... appears to have been responsible for some of the worst injuries inflicted”として、この義勇騎士団の中でも彼の異常な残虐性を明らかにしている (Reid 176)。

さらに、26行目の“a brave troop of Yeomanry”とは、バムフォードによる最大限の皮肉であることは言うまでもない。この事件では、マンチェスター義勇騎士団が未熟であったこと、そして彼らが群衆の中で身動きが取れずパニックに陥ってしまったことが事件の発端であったからだ。さらに28行目の“the defenceless”という表現は、彼らが女性や子供を含む無防備な一般大衆を次々と切りつけたという事実を連想させるものである。以上のように、第6連及び第7連では、ピーター

ルー虐殺事件の流血と残忍さを強調するイメージが提示されている。

続いて第8連以降の内容を見てみよう。

Then the joys which thou felt upon St. Peter's-field,  
Each week, or each month, some new outrage shall  
yield  
And thine eye which is failing, shall brighten again,  
And pitiless gaze on the wounded and slain.

Thy Prince then shall thank thee, and add to thy wealth,  
Thou shalt preach down sedition, and pray for his  
health;  
And Sidmouth, and Canning, and sweet Castlereagh,  
Shall write pleasant letters to dear Cousin H—!  
("Ode to a Plotting Parson", 29-36)

第8連では、32行目“the wounded and slain”のように、再び事件の犠牲者に言及することによって、ウィリアム・ロバート・ヘイ師の残虐性を強調している。注目すべきは、それに続く第9連であり、3名の実名が登場していることである。まず“Sidmouth”は、初代シドマス子爵ヘンリー・アディントン (Henry Addington, 1st Viscount Sidmouth, 1757-1844) を指し、1819年当時内務大臣 (Home Secretary) の職にあった。“Canning”は、トーリー党の政治家及び後の首相ジョージ・キャニング (George Canning, 1770-1827) を指し、当時は東インド会社を監視する監督局総裁 (President of Board of Control) の職に就いていたが、それ以前には外務大臣を経験している。最後に登場する“Castlereagh”は、カスルリー子爵ロバート・スチュアート (Robert Stewart, 2nd Marquess of Londonderry, 1769-1822) を指し、当時は外務大臣の職にあった。シドマス子爵及びカスルリー子爵は、1817年の人身保護条例の停止 (Habeas Corpus Suspension Act 1817) や六法または六議会制定法 (Six Acts 1819) の制定など、急進派や改革派に対して抑圧的な政策を実行したことで有名であった。また、ピータールー虐殺事件直後に風刺作家ウィリアム・ホーン (William Hone, 1780-1842) が発表して人気を博した政治パンフレット『ジャックの議会』 (The Political House that Jack Built, 1819) には、それぞれシドマス子爵が“THE DOCTOR”，カスルリー子爵が“DERRY-DOWN TRIANGLE”，そしてキャニングが“THE SPOUTER OF FROTH”として登場しており、この3名には“The Guilty Trio” (481) という称号が与えられている。従って、バムフォードの詩は当時のイギリス社会における彼らのイメージを前提としていたと推測できる。<sup>8</sup>

さらに、上述したパーシー・ビッシュ・シェリーの『無秩序の仮面』でも、カスルリー子爵及びシドマス子

爵が実名で登場している。

I met Murder on the way—  
He had a mask like Castlereagh—  
Very smooth he looked, yet grim;  
Seven bloodhounds followed him:  
…  
Clothed with the Bible, as with light,  
And the shadows of the night,  
Like Sidmouth, next, Hypocrisy  
On a crocodile rode by.  
(*The Mask of Anarchy* 5–8, 22–25)

シェリーの詩では、「殺人」はカスルリーのような仮面をかぶり、「偽善」はシドマス子爵のようだと表現され、両名とも直接的な批判の対象となっている。また、このシェリーの詩においても、8行目“Seven bloodhounds”の表現から、バムフォードの詩と同様に流血のイメージが与えられていることが分かる。

次に第10連及び11連の内容を見てみたい。

Each dungeon now silent shall sound with a groan,  
For the captive shall mourn in its darkness alone;  
And the chain shall be polish'd which now hangs in  
rust,  
And brighten'd the bar which is mouldering to dust.

And the tears of the virgin in torrents shall flow,  
Unheeded her tears, and unpitied her woe;  
And the blush of her cheek like a rose-bud shall fade,  
For the youth whom thy villainous arts have betray'd.  
(“Ode to a Plotting Parson”, 37–44)

ここでは、一旦閣僚等の批判からは離れ、このマンチェスターの集会で逮捕された罪のない人々が幽閉されるであろう地下牢の描写が続く。詩人は41行目で“the virgin”の悲運を嘆いているが、それと同時に恐らく今後待ち受けている自身の牢獄生活を想像しているのではないだろうか。

続いて第12連及び13連の内容を検証する。

For thy spies they shall lurk by the window at night,  
Like bloodhounds to smell out the prey of thy spite;  
And laugh shall be hush'd, and when townsmen do  
meet,  
None even his neighbour shall venture to greet!

And when gloomy famine doth stalk through the land,  
No comfort the poor shall receive at thy hand;  
And the widow shall curse thee while life doth remain,

And the orphan shall lisp back her curses again.  
(“Ode to a Plotting Parson”, 45–52)

ジョン・ガードナーは、バムフォードがウィリアム・ロバート・ヘイ師のスパイの重用について熟知していたという事実を挙げ、さらにシェリーの『無秩序の仮面』における「ブラッドハウンド」(“bloodhounds”)という語の使用から、両者の関連性についても指摘している(Gardner 152)。当時、多くの集会に於いて政府側のスパイが暗躍していたことは周知の事実であり、バムフォードはそれによって民衆が互いに疑心暗鬼に陥る様を描写しているのである。さらに第13連においては、これまでは裕福であったロッチデール教区の凋落が暗示されている。

最後に、第14連及び15連の内容を見てみよう。

And the night-wind shall sound as a scream in thine ear,  
And the tempest shall shake thee with terrible fear;  
And the zephyr that fans thee shall bring thee *no* cure,  
It will whisper a tale which thou canst not endure.

And the day shall arise, but its joys will be fled,  
And the season of darkness shall add to thy dread;  
And a mark of affliction thou ever shalt be,  
And none shall partake of thy troubles with thee.  
(“Ode to a Plotting Parson”, 53–60)

第13連もそうではあるが、これらの最後の2連は、ほぼ全ての行が“*And*”で始められ、ヘイ師の不幸な未来が象徴的に暗示されていることが特徴である。そして最終連では、彼が罪に苛まれる孤独な姿を予言している。

以上の検証から、バムフォード自身による第5連までの詩句の変更については、時代の変化に適合させた、あるいは宗教に対するある一定の配慮を行ったことが推測できる。しかしながら、1864年版の詩集 *Homely Rhymes* で完全に削除された第6連以降についてはどうだろうか。これに関しては、シェリーの『無秩序の仮面』のケースが参考になると思われる。つまり、文芸雑誌『イグザミネー』(*The Examiner*)の編集者リー・ハントがシェリーの詩の掲載を見送った理由である。以下は、詩の執筆から13年後の1832年、『無秩序の仮面』がようやく出版された際にリー・ハントが付け加えた序文からの引用である。

I did not insert it, because I thought that the public at large had not become sufficiently discerning to do justice to the sincerity and kind-heartedness of the spirit that walked in this flaming robe of verse. His charity was avowedly more than proportionate to his

indignation; yet I thought that even the suffering part of the people, judging, not unnaturally, from their own feelings, and from the exasperation which suffering produces before it produces knowledge, would believe a hundred-fold in his anger, to what they would in his good intention; and this made me fear that the common enemy would take advantage of the mistake to do them both a disservice. (*The Complete Works* 225)

文面からは、社会の大部分がこの刺激的な詩を受け入れるほどの見識を有していなかったという当時の判断、さらに国民及びシェリーへの心配から出版を断念したというリー・ハントの心情が窺えるが、実際は彼自身の保身が大きな理由の一つだったのではないだろうか。つまり、以前に舌禍事件を起こして服役した経験を持つ彼にとって、あたかも民衆を扇動するような内容を含み、さらに現閣僚を实名で公然と批判しているシェリーの『無秩序の仮面』を自身の紙面で発表することを躊躇したのではないかという可能性である。<sup>9</sup>

そのように考えれば、この件と全く同じケースがバムフォードの場合にも当てはまる。『無秩序の仮面』ほどの痛烈さはないが、バムフォードの詩にも当時の閣僚の实名及び後のジョージ四世となる摂政皇太子 (Prince Regent) が登場するからである。1864年の時点で、この詩の直接的な批判の対象であるウィリアム・ロバート・ヘイ師は既にこの世を去っているにもかかわらず、この箇所が削除されたままであるという事実は、1年間の獄中生活を経験したバムフォードが依然として政府の対応を意識している証拠であると考えられないだろうか。

であるとするならば、結局の所、マンチェスターでの政府の無慈悲な対応、さらに上述の人身保護条例の停止や六法制定等に代表される当時のリヴァプール内閣の徹底的な言論弾圧政策が、バムフォードを始めとする文壇及び言論人の自主的な規制という形で、心理的に極めて効果的に作用した証左となる。

## 注

<sup>1</sup> 1864年に出版された詩集は復刻版であり、1843年の詩集に50以上の詩を付け加えたものであることを詩人自身がその序文で説明している。

This volume is a reprint of Poems published in 1843, which have been long out of print. Upwards of fifty poems not included in any former collection have been added. The whole have been arranged by the Author, who has prefaced the volume with some Reminiscences of his Life. (*Homely Rhymes*)

<sup>2</sup> 自叙伝には "... not less than three thousand men formed a hollow square ..." と記されている。(*Passages* 198)

<sup>3</sup> スペンサー連はエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552-99) が『妖精の女王』(*Faerie Queen*) で用いた詩形とし

て有名である。

<sup>4</sup> 以降のこの詩の引用は全て *The Black Dwarf* からのものである。

<sup>5</sup> *The Black Dwarf* 誌上では必ずしも4行毎に改行されているわけではないが、ジョン・ガードナー (John Gardner) 及びロバート・ウォームズリー (Robert Walmsley) の形式に倣って、本論では全て4行連として扱っている。

<sup>6</sup> ヘンリー・ハントは扇動的な集会を催した罪で二年半、バムフォードは他2名とともに同様の罪で一年間の投獄を命じられている。

<sup>7</sup> ロバート・レイドは、この発砲で二人の男性が足に傷を負って運ばれたとしている (Reid 200-201)。

<sup>8</sup> 風刺・挿絵画家ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792-1878) の挿絵が入ったこのパンフレットは、当時10万部売れたとされている (コリンズ 196)。

<sup>9</sup> 詳細については、拙論「『ピータールー虐殺』と『無秩序の仮面』：シェリーの詩論と対立の構図」を参照されたい。

## 引用文献

- Bamford, Samuel. *Passages in the Life of a Radical*. London: Macgibbon & Kee, 1967.
- . *Homely Rhymes, Poems, and Reminiscences*. London: Simpkin, Marshall, and Co., 1864.
- . "Ode to a Plotting Parson." *The Black Dwarf* 7 (1821): 670-72.
- Chandler, James. *England in 1819: The Politics of Literary Culture and the Case of Romantic Historicism*. Chicago: U of Chicago P, 1998.
- Gardner, John. "The Suppression of Samuel Bamford's Peterloo Poems." *Romanticism* 13 (2007): 145-55.
- Hone, William. *The Political House that Jack Built. The New Oxford Book of Romantic Verse*. Ed. Jerome, J. McGann. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Marlow, Joyce. *The Peterloo Massacre*. London: Readers Union, 1969.
- Pirie, David B. "Keats." *The Romantic Period*. Ed. David. B. Pirie. Harmondsworth: Penguin Books, 1994.
- Read, Donald. *Peterloo: The 'Massacre' and its Background*. 1958. Manchester: Manchester UP, 1973.
- Reid, Robert. *The Peterloo Massacre*. London: Heinemann, 1989.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. Eds. Roger Ingpen and Walter E. Peck. Vol. 3. London: Earnest Benn Limited, 1965.
- . *Shelley's Poetry and Prose*. Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. 2nd ed. New York: Norton, 2002.
- Thompson, E. P. *The Making of the English Working Class*. London: Penguin Books, 1991.
- Walmsley, Robert. *Peterloo: The Case Reopened*. New York: Augustus M. Kelley, 1969.
- 江口誠. 「『ピータールー虐殺』と『無秩序の仮面』：シェリーの詩論と対立の構図」, 『英文学の地平：テキスト・人間・文化』音羽書房鶴見書店, 2009.
- コリンズ, A・S. 『文筆業の文化史』, 青木健・榎本 訳, 彩流社, 1999.

(2011年9月16日受理)